



# 日本地球化学会ニュース

No. 205      June 2011

## Contents

年会のお知らせ	2
2011年度日本地球化学会年会のお知らせ(2)	
学会からのお知らせ	3
第6回日本地球化学会ショートコース	
2011年度第2回鳥居基金助成の募集	
研究集会のお知らせと報告	5
日本地球惑星科学連合2011年大会報告	
Goldschmidt 国際会議2011のお知らせ	
2011年度第1回鳥居基金助成実施報告 (TE-69)	
院生による研究室紹介 No. 20	6
九州大学大学院理学研究院地球惑星科学部門	
無機生物圏地球化学研究室	(赤木右教授)
講演要旨作成上の注意	

## 年会のお知らせ

### 2011年度日本地球化学会年会のお知らせ(2)

主催：日本地球化学会

会期：平成23年9月14日(水)～16日(金)

会場：北海道大学学術交流会館（札幌市北区北8条西5丁目）と大学院地球環境科学研究所（北10条西5丁目）

年会 web page：http://www.wdc-jp.biz/geochem/2011/

交通：JR 札幌駅北口・西口より徒歩5分

アクセスについては、下記のサイトを参照下さい。

http://www.hokudai.ac.jp/footer/ft\_access.html（駅からの経路）

http://www.hokudai.ac.jp/bureau/map/guide-map.pdf（キャンパス内地図）

内容：口頭発表及びポスター発表（昨年と同様、全ての発表を22のセッションの中で行います）、夜間小集会、学会賞記念講演、総会、懇親会、クロージングセレモニー。

学生発表賞：きわめて優れた口頭・ポスター発表を行った日本地球化学会学生会員に授与します。学生発表賞を希望する学生会員は講演申込時にエントリーして下さい。

セッションテーマ：このお知らせの最後にまとめて示しますのでご覧下さい。講演申し込みの際は、必ずセッションを一つ指定して下さい。

講演申込、講演要旨原稿受付：昨年度と同様に、同時に行います。要旨提出を行わないと講演申込は完了しません。年会 web page からのみ受付ます。

6月13日(月) 14時受付開始。7月19日(火) 14時締切。講演要旨の書き方は、本ニュース最後にある「講演要旨作成上の注意」または上記 web page をご覧下さい。Web page からの申込が困難な場合は、下記の年会事務局あてに締切の1週間前までにご連絡下さい。なお、投稿する要旨の原稿は締切日までは修正可能ですが、締切日を過ぎた後は一切修正できず、そのまま J-STAGE で公開されます。

参加予約申込：年会 web page から、指示に従って申し込みして下さい。6月13日(月) 14時受付開始。8月26日(金) 14時締切。

プログラムの公表：プログラムは講演要旨申込終了後直ちに作成し、8月1日頃年会 web page 上に公開

します。事前に要旨集の配付を行いませんので、プログラムの確認はこの web page で行って下さい。8月末頃に配付される地球化学ニュースにもプログラムを掲載します。なお、講演要旨は8月26日頃に、J-STAGE 上で公開されます。

参加登録費（講演要旨集1部含む）：

予約：一般会員5,000円、学生会員2,000円、  
会員外7,000円、会員外学生3,000円  
当日：一般会員6,000円、学生会員3,000円、  
会員外7,000円、会員外学生4,000円

\*なお、会員は日本地球化学会及び共催学会（web page で御確認下さい）の会員を指します。当日受付で入会された方も会員扱いとします。学部生は無料（但し要旨集なし）。

懇親会：9月15日学会賞等受賞講演終了後、アスペンホテルにて。

予約5,000円（学生3,000円）、当日6,000円（学生4,000円）。

予約申込による参加登録費・懇親会会費・講演要旨集

代金の支払い方法：これらのお支払いは、年会 web page から、クレジットカードによるオンライン決済でお願いします。なお、各種の支払いは代理で行うことも可能です。クレジットカードによるお支払いが困難な場合は、年会事務局に締め切りの1週間前までにお知らせ下さい。年会当日の参加登録費のお支払いは現金となります。領収書を必要とする場合は、年会当日に受付にお申し出下さい。

併設展示：関連機器メーカーその他による展示会を併設する予定です。詳細については年会事務局にお問い合わせ下さい。

小集会：学会期間中の昼食時間、あるいは講演終了後に小集会を行うことができます。希望のあるグループは年会事務局にお問い合わせ下さい。

セッションテーマ：（連絡責任者は1番目に記載）

各セッションの概要については、年会 web page をご覧下さい。

- 01 大気微量成分の地球化学と相互作用  
谷本浩志（環境研）、角皆潤（北海道大）、松本潔（山梨大）、持田陸宏（名古屋大）
- 02 古気候・古環境解析の地球化学  
原田尚美（JAMSTEC）、入野智久（北海道大）、渡邊剛（北海道大）、中塚武（名古屋大）
- 03 放射性廃棄物と地球化学

- 日高洋 (広島大), 大貫敏彦 (JAEA), 吉田英一 (名古屋大), 河田陽介 (三菱マテリアル)
- 04 水—鉱物界面の地球化学  
福士圭介 (金沢大), 斉藤拓巳 (東京大), 柏原輝彦
- 05 海洋における微量元素・同位体  
蒲生俊敬 (東京大), 宗林由樹 (京都大), 張 勁 (富山大), 小畑元 (東京大)
- 06 水—岩石相互作用: 水質形成~CO<sub>2</sub>地中貯留  
上田晃 (富山大), 鹿園直建 (慶應大), 徂徠正夫 (産総研)
- 07 炭化水素資源の地球化学  
早稲田周 (石油資源開発), 坂田将 (産総研), 鈴木德行 (北海道大)
- 08 陸域・土壌・水圏生態系の物質循環  
高橋善幸 (環境研), 瀬戸繭美 (奈良女子大), 和田茂樹 (筑波大), 杉本敦子 (北海道大)
- 09 初期地球のダイナミクスと生命  
古川善博 (東北大), 西澤学 (JAMSTEC), 渋谷岳造 (JAMSTEC), 大竹翼 (東北大)
- 10 地球化学と生理学の融合: 生体プロセスの研究から地球化学へ  
沢田健 (北海道大), 力石嘉人 (JAMSTEC)
- 11 Geofluids: 地球内部流体とその役割  
岩森光 (東工大), 小木曾哲 (京都大), 横山哲也 (東工大)
- 12 マントル物質の化学とダイナミクス  
下田玄 (産総研), 鈴木勝彦 (JAMSTEC), 小木曾哲 (京都大)
- 13 宇宙惑星化学 1: 初期太陽系円盤の宇宙化学  
横山哲也 (東工大), 伊藤正一 (北海道大), 橘省吾 (東京大)
- 14 同位体効果研究の地球化学への応用  
武蔵正明 (首都大), 大井隆夫 (上智大), 野村雅夫 (東工大)
- 15 宇宙惑星化学 2: 微惑星形成期から46億年の太陽系史  
伊藤元雄 (JAMSTEC), 山口亮 (極地研), 山下勝行 (岡山大)
- 16 現世および過去の有機物, 微生物, 生態系の地球化学  
高野淑識 (JAMSTEC), 山中寿朗 (岡山大), 大庭雅寛 (東北大)
- 17 水圏環境地球化学

- 益田晴恵 (大阪市大), 張 勁 (富山大), 板井啓明 (愛媛大), 高橋嘉夫 (広島大)
- 18 大気水圏地球化学 (全般)  
吉川久幸 (北海道大), 鈴木光次 (北海道大), 河村公隆 (北海道大)
- 19 固体地球化学 (全般)  
伊藤正一 (北海道大), 坂本直哉 (北海道大)
- 20 地球化学のフロンティア  
角皆潤 (北海道大), 赤木右 (九州大学), 北川浩之 (名古屋大)
- 21 災害による環境汚染および復興の地球化学  
南川雅男 (北海道大), 吉田尚弘 (東工大), 日下部正志 (日本海洋生物環境研), 渡辺豊 (北海道大)
- 22 新しい原子量の表記とその経緯について (仮題)  
学会提案  
発表: 海老原会長, 米田成一会員 (IUPAC 正委員)  
(50分, 公募せず)

#### 年会事務局:

〒060-0810 札幌市北区北10条西5丁目  
北海道大学大学院地球環境科学研究院内  
2011年度日本地球化学会年会事務局  
E-mail: gsj 2011-loc@geos.ees.hokudai.ac.jp

### 学会からのお知らせ

#### ●第6回日本地球化学会ショートコース

地球化学は, 試料を構成する元素, 同位体, 化学種の存在度, 分布, 移動, 変化を空間的・時間的に調べ, それらを支配する法則や原理を見いだすことにより, 地球や惑星を構成する物質の構造や循環を調べる学問である。分析・データ解析技術の進歩により, 試料から得られる地球化学的知見の質と量は飛躍的に向上し, 今では, 鉱物学, 岩石学, 地質学, 地球物理学など, 他の地球科学分野の発展を支える重要な学問となっている。しかしその一方で, 地球化学の応用性・実用性のみが注目され, 地球化学の本質である現象の素過程を調べる研究が少なくなるとともに, 時間をかけてじっくり調べ, 問題点を徹底的に掘り下げて理解する機会も減少するという問題も顕在化している。こうした問題に対し, 日本地球化学会では地球化学講座の発行を通じて地球化学の啓蒙を進めてきた。そして日本地球化学会では次なる啓蒙活動として, 大学生・

大学院生を対象とした「ショートコース」を、年会日程（平成23年9月14, 15, 16日）に合わせ、9月13日（火）に開催する。本ショートコースでは、地球化学を研究する上で必須となる基礎知識の包括的修得と、最先端研究に触れることによる視点の拡大、という二つの目標を掲げ、将来の地球化学を担う若手研究者の育成を目指す。

#### 講演プログラム（案）

##### 講演1 「大気化学と地球環境」

谷本浩志（国立環境研究所）

##### 講演2 「地球化学的手法を用いた新しいマグマ成因論の構築を目指して」

折橋裕二（東京大学地震研究所）

##### 講演3 「放射性同位体を利用した地球科学」

坂口 綾（広島大学理学研究科）

##### 講演4 「生命と海の微量元素」

宗林由樹（京都大学化学研究所）

##### 講演5 「科学技術コミュニケーションの視点でプレゼンテーションスキルを磨こう～「伝える」プレゼンから「伝わる」プレゼンへ～」

石村源生（北海道大学高等教育推進機構）

#### (1) 開催日時・場所

日時：平成23年9月13日（火） 午前9時30分～夜6時頃まで（年会開催日：2011年9月14～16日）

会場：北海道大学

会場へのアクセス方法については、年会ホームページをご覧ください。

日本地球化学会2011（詳細は決定し次第、ホームページ等でお知らせします）

年年会：<http://www.geochem.jp/meeting/index.html>

#### (2) 参加費

3,000円（講師謝金費、資料代、弁当代等を含む）。当日受付で徴収いたします。

日本地球化学会学生会員は学会からの補助により2,000円引とします。

#### (3) 申込み方法

7月上旬から、ホームページ上で参加申し込みを受け付ける予定です。しばらくお待ち下さい。最新の情報は下記のアドレスをご覧ください。

<http://www.kueps.kyoto-u.ac.jp/~web-geochem/ShortCourse2011.html>

#### (4) 定員・申込締切

50名（先着順）。9月5日（用）を参加申込締切日としますが、定員になり次第、参加申し込みを締め切らせて頂きます。主として本学会の学生会員を対象としますが、非会員の方の参加も歓迎します。

7月上旬から参加申し込み受付を開始いたします。詳しくは日本地球化学会ホームページをご覧ください。

#### (5) お問い合わせ

不明な点などございましたら平田まで連絡下さい。

平田岳史（京都大学大学院理学研究科）：

[hrt1@kueps.kyoto-u.ac.jp](mailto:hrt1@kueps.kyoto-u.ac.jp)

#### ●2011年度第2回鳥居基金助成の募集

2011年度第2回鳥居基金助成の応募の締め切りは、2011年7月31日となります。本学会ホームページに応募要項がありますので、ご参照の上、応募書類を提出して下さい。なお今回の助成の対象は、2011年10月から2012年9月までの1年間に実施される海外渡航及び国内研究集会となりますのでご注意ください。

<http://www.geochem.jp/prize/torii.html>

#### 申請手続

応募者は、学会ホームページからダウンロードした申請書（学会誌Vol.43特別号（会員名簿）の94, 95ページにも掲載されています）（(1)-Aまたは(1)-B）を所定の期日までに下記に提出して下さい。参考となる資料（海外派遣については業績リストおよび学会参加の場合は学会概要等、国内研究集会については集会の案内・概要等）を添付して下さい。なお、海外渡航により国際学会等での研究発表を行う場合は、申請書の「研究の目的」欄に、渡航にあたっての抱負や発表する論文の内容・重要性などを記載して下さい。また、海外派遣に関しては、他の研究助成金との重複受給は認められておりませんので、ご注意ください。

#### 提出先：

三澤啓司（2011年度庶務幹事）

〒190-8518 東京都立川市緑町10-3

情報・システム研究機構 国立極地研究所

Tel：042-512-0709, Fax：042-528-3479

E-mail：affairs@geochem.jp

## 研究集会のお知らせと報告

### ●日本地球惑星科学連合2011年大会報告

地球惑星科学連合大会は、地球科学、惑星科学、宇宙科学に関連する日本最大のジョイントミーティングで、1990年から開催されています。今年の連合大会は、5月22日から27日までの6日間、千葉県の幕張メッセで開催されました。その投稿件数は3,700件と去年より約100件増加し、過去最大規模での開催となりました。地球化学関連のセッションも複数開催され、それぞれのセッションで活発な研究発表と交流が行われました。

今年の連合大会の特徴は、東日本大震災や新燃岳の噴火関連のセッションが開催され、社会的な関心が高かったことではないでしょうか。「東北地方太平洋沖地震」の特別講演は、多くの一般の方々も来聴されました。会場内で最大の国際会議室でもすべて入りきれず、複数の会場に講演が中継されていました。災害というネガティブな面ではありますが、基礎研究の成果が社会に還元された事例だろうと思います。

連合大会は、単なる研究発表の場ではありません。団体展示、書籍出版、大学インフォメーションパネル出展を通じた地球・惑星科学関連の情報拠点でもあります。日本地球化学会でも学協会ブースを出展し、学会員の勧誘、機関誌である地球化学や *Geochemical Journal* の無料配布、若手会やショートコース等の研究集会の案内を行いました。また、日本地球化学会が監修している「地球化学講座」や学会員が著者となっている書籍の販売も行いました。これらの書籍は割引価格で販売されたものが多く（地球化学講座は25%引き、会員が著者の書籍は最大割引価格20%引き）、完売が相次ぐなどの盛況でした。

連合大会の規模の大きさは、多様な研究者の参加によるものです。従って、関連のある他分野の最新の成果を聴くだけでなく、他分野の研究者と交流できる場でもあります。これらの利点があるにもかかわらず、連合大会に参加する学会員は残念ながら、あまり多くありません。日本地球化学会には、秋に開かれる年会有るので、連合大会に参加する必要はないかもしれません。また、授業等のスケジュールで参加が困難なこともあると思います。しかし、連合大会は、専門が異なる分野の研究者と接点を作る絶好の機会であり、また他分野の最新の研究成果を直接聴ける場でもあります。多くの会員の皆様の積極的な参加をお待ちしてお

ります。

下記に今回、日本地球化学会ブースで販売した会員書籍および関連グッズのリストを示します；

著書名：海洋地球環境学—生物地球化学循環から読む  
著者：川幡穂高  
出版社：東京大学出版会

著書名：96%の大絶滅—地球史におきた環境大変動  
著者：丸岡照幸  
出版社：技術評論社

著書名：「海底鉱物資源」未利用レアメタルの探査と開発

著者：白井 朗  
出版社：オーム社

著書名：湖水爆発の謎を解く—カメルーン・ニオス湖に挑んだ20年—

著者：日下部 実  
出版社：岡山大学出版会

物品名：イラスト周期表下敷き

制作者：佐々田俊夫

出版社：愛知教育大学

デザインは下記サイトでご覧になれます；

<http://www.element.aichi-edu.ac.jp/plastic-sheet.html>

(広報幹事 下田 玄)

### ●Goldschmidt 国際会議2011のお知らせ

Goldschmidt 国際会議の早期参加登録の締め切りが6月15日と迫っています。早期締め切りを過ぎると100ユーロ割高に、現地登録すれば150ユーロ割高になりますので、早期の登録をお勧めいたします。

〈今後の日程〉

2011/6/15, 早期参加登録終了

7/15, オンライン参加登録終了

8/14~19, Goldschmidt 2011開催 (チェコ共和国プラハ)

(広報幹事 下田 玄)

## ●2011年度第1回鳥居基金助成実施報告 (TE-69)

氏名 (所属) : 川口慎介 (海洋研究開発機構・ポスト  
ドクトラル研究員)

助成 : 海外渡航 (オーストリア)

課題 : 2011年欧州地球科学連合年會での研究成果公表

日本地球化学会「鳥居基金」の助成を受け、2011年4月3日からはじまる欧州地球科学連合年會に参加するため、同會開催地であるウィーンを訪れた。風が吹くと少し肌寒いが凍えるほど寒いと言うわけでもない、まるやかな日差しが温かな初春の陽気であった。音楽の都ウィーンの市街地はすっかり観光地化しており賑やかであるが、少し入った路地からは古都の香りが感じられた。目抜き通りに並ぶオープンテラスのカフェでは、老若男女を問わずスイーツに舌鼓を打っている様子が印象的であった。ウィーンのスィーツと言えばザッハートルテであるが、ホテルザッハーのものはアンズの酸味がやや強く、個人的にはデメルザッハートルテの方が好みであることがわかった。

今年の同大會の開催が日本にとって年度初めである4月第1週の開催であったためか、会場にも街中にも日本人はあまり見られなかった。公式記録によると、総勢10,725人(96カ国)の内、日本からの参加はわずか187人であるということで、私の主観と大きく違わない。また1万人を超える参加者のため、これは米国地球物理学連合秋季大會も同様であるが、多くの会場で並行してセッションが開催され、聞きたい講演が重複あるいは時間的に隣接することもしばしばで、いずれに顔を出すかで頭を悩ませた。「安定同位体大気化学」セッションのポスター会場では、気体成分分析について旧知の研究者らと重要なアイデアを交換することができた。私は「Origin of methane in the Okinawa Trough hydrothermal fields: Implication for long transport of biogenic methane at subsurface geofluid system」と題し、沖縄トラフに存在する熱水域で典型的に見られる高濃度メタンの化学的な起源から海底下水循環系の拡がり論じた。内容の一部が最近 *Geochemical Journal* に掲載されたため、詳しくはそちらを参照いただきたい。火曜と木曜の夜には、それぞれ「非質量依存同位体分別」および「環境中のメタン」セッションで企画された夕食会に参加し、研究から私生活までを(というほどではないが)語り合った。特に得るものは無いと感じたが、こうして互いに顔を見知っておくだけでも、何かが起こるか



同行した藤内博士(左)とカールス教会前にて

もしれないので、今後も可能な限り顔を出したいと思う。また木曜の日中には会場に隣接する IAEA 本部に松本博士を訪ね、驚くほどシステムティックな全自動全希ガス分析装置を見学させていただいた。会期中は同じホテルに投宿した藤内博士(写真)と夜な夜な語り大変に刺激的であった。最後に、東日本大震災の影響で社会システムに混乱が残る中、当初の予定通り出張することを認めてくださった地球化学会、同僚および家族の理解に謝意を表す。ありがとうございました。



## 院生による研究室紹介 No. 20

九州大学大学院理学研究院地球惑星科学部門無機生物圏地球化学研究室

(赤木右教授)

みなさんこんにちは。今回は、九州大学大学院理学研究院地球惑星科学部門無機生物圏地球化学研究室(無機研)の紹介をさせていただきます。担当は博士課程2年の大木です。どうぞよろしくお願い致します。

本研究室は2011年4月現在、赤木右教授、石橋純一郎准教授、島田和彦技術専門職員の3名のスタッフと、大学院生6名(博士課程2名、修士課程4名)、学部生3名で構成されています。蛇足ながら、私どもの所属する地球惑星科学部門の女子学生の割合は2割ほどなのですが、最近の我が研究室は女子学生の割合が高く、今年度は遂に、男子学生よりも女子学生が多

いというなかなか珍しいメンバー構成となりました(図1)。

まずは我々の研究室が掲げる目標について簡単にご紹介致します。当研究分野では、地球化学、熱力学、分析化学などを土台にして、生物が地球環境にもたらす影響を理解することを大きな目標として、日々研究に取り組んでおります。例として、岩石を構成する元素が生物により放たれる過程(風化)、天然水中の元素の変化を受ける過程(水質形成)、海底などの高熱環境(熱水系)における元素の移動、環境が生物に与える影響(フィードバック)、地球の活動に伴って元素が移動や集積するプロセス(資源形成)や地下水の通り道で起こる化学反応など、前述の三つの学問を用いて捉えることができる様々な現象の解明を目指しています。本稿では、我々の研究室で進めている研究の一部をご紹介致します。

陸から海底に至るまでの物質の循環プロセスに、生物がどのように関与しているかをテーマにしていくつかの研究が並行的に行われています。風化反応は地球の表層を循環する物質の起点となる過程で、リン、ケイ素、カリウム、鉄など多くの生物にとって栄養となる物質を、岩石圏から全ての生物圏に供給しています。風化反応は二酸化炭素から見ても、空気中の二酸化炭素が吸収され炭酸水素イオンとして水循環に入る重要な反応です。更に風化反応の速度は、地球環境の変遷と密接にかかわり合っていると考えられます。その風化反応に植物がどう関わっているか研究しています。また、海洋生態系についても、特にケイ藻に注目して、生物ポンプの研究を行っています。

また、当研究室では南北両半球のミズゴケ堆積物を

用いて、過去1万年間の大気中二酸化炭素濃度の復元を試みる研究を進めています。これまで、過去の大気中の二酸化炭素濃度を知るために、研究者は雪水に閉じ込められた空気を分析してきました。しかしながら、1000年以内の短いタイムスケールでは、世界各所の雪水から得られた二酸化炭素濃度の変動は一致していません。藻類や鉱物などの混入、空気が閉じ込められるまでの時間がかかる等の理由で、短いタイムスケールでは誤差の影響が出やすく正確に求めることが難しいためと考えられます。その点で、ミズゴケは、過去およそ一万年にわたって堆積を続けてドーム状に盛り上がった湿原を形成している、ミズゴケの気孔が退化しているために大気中の二酸化炭素の濃度がミズゴケの炭素同位体比にダイレクトに反映されると予想される、といったユニークな特徴を持つため、ミズゴケ堆積物を用いることで過去1万年の大気中二酸化炭素濃度を復元できる可能性があります。また、ミズゴケ自身が保持した水を利用して、気温、湿度等の気候情報の復元する試みも進行中です(図2)。

更に、我々の研究室で進めている研究を語る上で、水分分析を欠かすことはできません。水は多くの元素を溶解させる能力があり、かつ液体として移動する速度が速いことから地球表層で物質(元素)が移動する媒体として重要な役割を果たしています。水は陸から海洋へ陸源物質を運搬する媒体です。地下水や温泉に代表される地殻内流体は陸だけでなく海底下にも存在し、特に中央海嶺や沈み込み域などの活動的な海域においては陸上の大河に匹敵する大きな熱/物質フラックスを担っていることが分かってきました。中でも海底温泉の湧き出し口(熱水噴出孔)の周囲に見られる



図1 2011年度の研究室集合写真。前列左端から、石橋准教授、赤木教授。前列右端が著者。



図2 採取したミズゴケの手入れをしている1コマ。毎日の日課です。

豊かな生物群集の発見は、地球上の生物圏はすべて太陽エネルギーに依存しているという常識を覆すものでした。こうした生態系の一次生産者である「化学合成」微生物は、熱水流体によって海底地殻内深部から運ばれてくるメタンや硫化水素などの還元性物質の持つ化学エネルギーに依存して有機物を生産し生命活動を維持しています。さらに最近では、こうした化学合成微生物群集は酸素が地球表層を覆う以前の原始地球において原始生命から初期進化した姿を保持するものであるという考えが提唱されており、多くの科学者の

注目を集めています。当研究室では、海底下の地殻内流体の挙動を解明するプロジェクトの一翼を担って、潜航調査や掘削調査などで得た試料の化学分析から生命圏の繁栄を支える物質（元素）移動を解明する、或いは生命圏が広がる海底下の化学環境を推定する研究を展開しています（図3）。

サンプリングや観察を中心とする研究、実験を中心とする研究、仮説に基づいて進める研究、謙虚に地球と向き合って進める研究等、研究のスタイルは多種多様です。サンプリングは半数以上の学生が経験し、海



図3 海底堆積物のボーリングコアを採集している風景。



図4 熊本県阿蘇山周辺におけるサンプリングの1コマ。



図5 2010年度の研究室送別会です。定期的な飲み会も楽しみの1つです。



外，研究航海などのフィールド調査は，普段の研究室での生活とは一味違った，なかなか経験できない貴重な活動です（図4）。

最後に普段の研究室生活について簡単にお話します。毎週火曜日には研究室ゼミがあり，教員と学生が持ち回りで文献紹介と研究報告を担当しています。ゼミの発表では毎回議論が白熱しており，多くの新しい発見をすることができます。また普段から教員と学生間，あるいは学生同士で研究に対して積極的に議論を交わすなど，研究室は常に活気に溢れています。また学科内のイベントとして，不定期で地惑ソフトなるものがあります。近くの野球場を借り切ってソフトボールに勤しんでいますが，何故か我々の研究室は高校球児が毎年多かったため，毎回積極的に参加したりしています（最近では赤木教授も参加されました）。また研究に疲れた時は，コーヒーを片手に雑談，飲み会や学

生間での小旅行など，多彩な研究室イベントを通してリフレッシュしています。多少，話の方向性がズレてしまいましたが，私どもの研究室は，何事においても非常に活発なメンバーの集まりと言えます（図5）。

以上，簡単ではありますが本研究室の紹介をさせていただきました。紙面上では，残念ながらほんの一部しかご紹介できませんでしたが，興味を持たれた方は当研究室のHP（URL:<http://coffee.geo.kyushu-u.ac.jp/>）も併せてご覧いただければと思います。また大学院を受験される方を大歓迎いたします。近くに御寄りの際は，飛行機が頻繁に上空を通過する理学部本館3階にある当研究室にぜひお越し下さい。

（九州大学大学院理学研究院地球惑星科学部門  
無機生物圏地球化学研究室  
博士課程2年 大木誠吾）

165 mm	
25 mm	<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">           講演番号記載 スペース (空欄)         </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;"> <b>講演題目</b>             ○渡辺春樹<sup>1</sup>、村上直子<sup>1</sup>、長沢太郎<sup>2</sup>            ( <sup>1</sup>北大低温研、<sup>2</sup>北大院環境 )         </div> </div>
	<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 40%; border: 1px solid black; padding: 2px;">40 mm</div> <div style="width: 10%; border: 1px solid black; padding: 2px;">10 mm</div> </div>
190 mm	<p>講演要旨作成上の注意</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) フォントはできるだけ明朝体を使ってください。</li> <li>2) 原稿は、B5 版になります。文字が小さくなりすぎないように注意してください。</li> <li>3) 枠は範囲を示しているだけです。書く必要はありません。</li> <li>4) A4 用紙に上部 31 mm、下部 30 mm、左 22.5 mm、右 22.5 mm のマージンを設定してください。</li> <li>5) 研究題目、発表者、ならびに所属は例示に準じて記入し、講演者の左側に○印をつけてください。講演題目などに関する英文表記についても同様です。</li> <li>6) 左上の講演番号を印刷するスペースは必ず空けておいてください。</li> <li>7) PDF ファイルで送るため、300kb 程度のファイル容量で作ってください。</li> <li>8) 一般講演は、要旨 1 ページ、招待講演は 2 ページまで。</li> <li>9) 原稿は、プリントして正常に印刷できるかご確認の後送ってください。</li> <li>10) 講演要旨の締め切りを厳守してください。</li> </ol>
20 mm	<p>Title</p> <p>○H. Watanabe<sup>1</sup>, N. Murakami<sup>1</sup> and T. Nagasawa<sup>2</sup> ( <sup>1</sup>Inst. Low Temp. Sci., Hokkaido Univ., <sup>2</sup>Graduate School of Environ. Sci., Hokkaido Univ. )</p>

### ニュースへ記事やご意見をお寄せください

地球化学に関連した研究集会，書評，研究機関の紹介などの原稿をお待ちしております。編集の都合上，電子メールでの原稿を歓迎いたしますので，ご協力の程よろしくお願いいたします。次号の発行は2011年9月頃を予定しています。ニュース原稿は7月下旬までにお送りいただくよう，お願いいたします。また，ホームページに関するご意見もお寄せください。

編集担当者（日本地球化学会ニュース・HP 幹事）

谷本浩志

〒305-8506 茨城県つくば市小野川16-2  
国立環境研究所  
地球環境研究センター

Tel：029-850-2930

E-mail：news-hp@geochem.jp

鈴木勝彦

〒237-0061 横須賀市夏島町2-15  
海洋研究開発機構（JAMSTEC）  
地球内部ダイナミクス領域研究（IFREE）

Tel：046-867-9617／Fax：046-867-9315

E-mail：news-hp@geochem.jp